

陳舜臣さんを語る会通信

NO.140 Jun. 2025

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2025年6月15日

『万邦の賓客(ばんぱうのひんきゃく) 中国歴史紀行』

『万邦の賓客』は、第一部 万邦の賓客、第二部 西域・シルクロード、第三部 辺境歴史紀行、第四部 歴史を歩くの四部からなっています。「万邦の賓客」とは、「あらゆる国からやって来た大切な客」との意味ですが、陳舜臣さんは、文庫版のあとがきで、「万邦の賓客ということばは私が好きなので、(第一部のタイトルとし、さらに)本書の総タイトルとした次第である」とおっしゃっています。『万邦の賓客』には単行本(1999 集英社)と文庫本(2001 集英社)があります。(編集委員 橘雄三)

単行本「あとがき」抜粋引用
傍線は加筆

スタインが新疆のダンダーン・クリフの寺院址から発見した「蚕種西遷説話」の板絵を、大英博物館でみたとき、私はこのような美術品は国境をこえて、あらゆる国の賓客だと思った。たしかに当時の西欧の「探検家」はひどいことをした。原状撮影もせずに壁画を切りとったドイツ隊の暴挙など、さすがのスタインも憤慨している。敦煌の壁画を薬品で剥がしたウォーナーは、いくら京都や奈良を救ったという人でも、許せないことではないか。私はこれまで著書のなかで、非難してきている。

だが、ベゼクリフやキジルの歳月と自然の力の破壊をみる

文庫本キャッチコピー

「歴史のうねりを、自分の胸に受けとめることは、文物鑑賞の醍醐味といってよい。それを製作した工人の息吹が耳もとに伝わってくれば、私たちはより豊かな精神の膨らみに胸を躍らせることができる」(著者)

史書を繙き、悠久の時を生



と、彼らがもち出さなければ、はたしてその後どうなったか、悲観的な見方しかできない気がする。

それほど大英博物館の保管法は、感動的なほどすぐれていた。またそれらを鑑賞しようとする人たちも、はるばる沙漠をこえて、キジルやニヤへ行けるであろうか。文献も名画もそれを愛する人たちのものである。：。大英博物館で作った詩を私は、秘文名画は万邦の賓なりという句で結んだ。

一九九九年一月

きた人を温かくみつめ、シルクロードへの想いを記し、辺境を旅した探検家たちの足跡を辿る珠玉の中国歴史随想。



第一部	万邦の賓客	NHKスペシャル『故宮◆至宝が語る中華五千年』(1996、97 日本放送出版協会)全4巻、各巻の巻頭に書いた文章4編
	ばくや 牧野の戦い	【第1巻】[先史・殷・周][春秋 戦国][秦・漢] 「牧野の戦い」は、紀元前11世紀、殷の紂王と周の姫発(武王)を中心とした勢力が牧野(殷都南郊)で争った戦い(周軍が勝利し、約600年続いた殷王朝は倒れ、周王朝が天下を治めることになった)で、陳さんは、歴史の「戦争」として、論じるのは、…、「牧野の戦い」がいまのところ第一号といえるのではあるまいか、とおっしゃり、なぜ殷の青銅器はこんなに複雑で怪奇なのだろうか。そして酒器がどうしてこんなに多いのか…、で文章を終えている。その他キーワード■太公望
	ひすい 曲水と淝水	【第2巻】[六朝][五胡十六国・北魏][隋・唐] タイトルの曲水とは、永和9年(353)3月3日、会稽山陰(今の浙江省紹興市郊外)の蘭亭に文人たちが集まり催した曲水の宴のこと。また、淝水とは、383年、華北の前秦と江南の東晋とが激突した淝水(現在の安徽省淮南市南郊)の戦いのこと。前者の中心人物は王羲之で後者は苻堅。苻堅は陳さん思い入れの人物で、『中国傑物伝』に、理想を持った現実主義者として、16人の一人に取り上げられている。
	江南の時代	【第3巻】[唐・五代][北宋][南宋] 盛唐の「安史の乱」(755-763)、唐末の「黄巢の乱」(875-884)、北宋と遼との「澶淵(せんえん)の盟」、南宋と金との「紹興和約」及び「乾道和約」などを通して江南の経済力に言及。そしてまた、文化においても、重心は南に移っていったと記す。■『小説 マルコ・ポーロ』
	画人の系譜	【第4巻】[元][明][清] 画人の系譜として、まず、元末四大画人の一人、黄公望(1269-1354)を取り上げ、黄公望の「富春山居図」は、故宮の収蔵する絵画のなかで最も素晴らしいものである。ところが、台北の故宮には「富春山居図」と称する絵が二つあるのだ、と話が始まり、詳述される。あと、『中国画人伝』に登場する画家が続くが、特に、八大山人(1626-1705)の描写は筆が走る。

第一部 いくつかの補足 画像を中心に

「曲水と澗水」 曲水の宴が催された蘭亭

永和九年（三五三）三月三日、王羲之は文人を会稽山陰（今の浙江省紹興市郊外）の蘭亭に招き曲水の宴を催した。その時に作られた詩37編（蘭亭集）の序文として王羲之が書いたもの（草稿）が、書の最高傑作と言われる「蘭亭序」である。「蘭亭序」の真跡は存在せず、左にあげたのも、褚遂良（ちよすいりょう）の臨本である。

蘭亭 入口ほか



編集委員撮影

「江南の時代」 南宋の陵墓

『小説 マルコ・ポーロ』及び『チンギス・ハーンの一族』に、南宋諸帝の陵墓をあげて巨利を得る楊璉真加の記述があります。楊璉真加は実在で、悪名の高い人物です。

『チンギス・ハーンの一族』から引用します。

楊璉真加はこの大規模な墓あらしで巨利を得た。金千七百両、銀六千八百両、その他玉器、大珠などである。田は二万三千畝で、税賦を納めない百姓は二万三千戸、彼らは楊璉真加には納めていたのだ。これはのちに官物盗用で失脚したときにわかったことである。

（集英社文庫版4巻 p.307-308）

■南宋陵墓は浙江省紹興市の東南にある。

南宋陵墓遠景



→『故宮』（1997 日本放送出版協会）第3巻より

↑ 3g.163.com より

「画人の系譜」 八大山人

『中国画人伝』 「八大山人」の冒頭です。

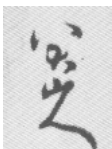
八大山人（のえがく鳥は、すべて屹然とした姿勢をとっている。その目は鋭く、人間の理不尽を許さず、あくまでもなにものかにはおかおうとしているかにみえる。じっと見ていると、その目に抵抗の光をともしただけのために、鳥を描いたという気がしてくる。

陳さんはこの文章に、左の絵を添えています。この絵の署名を拡大したのが左のAです。八大山人の別の絵では、Bのような署名もありまゝす。「哭之」というより、人の顔に見えますが

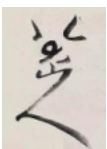


『中国画人伝』
「八大山人 花卉雜画冊」より

A



B



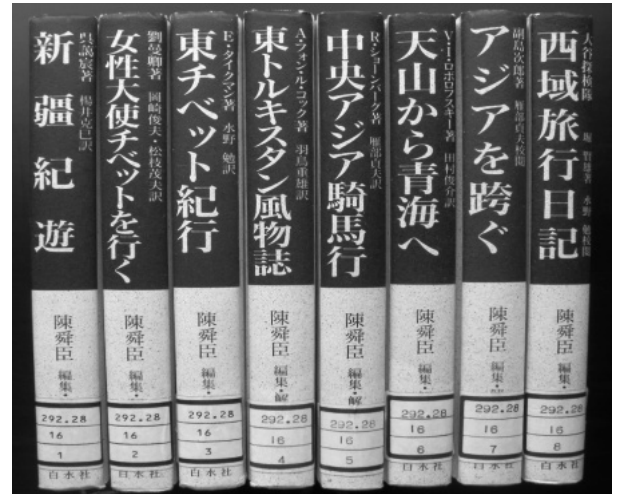
第二部「西域・シルクロード」、第三部「辺境歴史紀行」

第二部	西域・シルクロード	『西域シルクロード全紀行』(1995-96 読売新聞社)全5巻の各巻に寄せた「巻頭のこぼし」5編
	敦煌以前のこと	【第1巻】「敦煌の旅」敦煌石窟寺群が詳述される。◆「敦煌以前のこと」冒頭、馬王堆の帛(はく 絹布)画くらいが、残っている中国絵画史のあけぼのようだ、ではじまる。続いて、金縷玉衣(きんるぎょくい)など厚葬に話が及び、あと、石窟寺や敦煌周辺勢力の宗教事情について語られる。特に第17窟の洪ベン像についての記述が興味深い。
	西域南道	【第2巻】「シルクロードの旅」シルクロードは敦煌から、天山南麓の諸オアシスを經由してカシュガルにいたる西域北道と、クンルン山脈北麓のオアシスを縫ってカシュガルで北道と合流する南道とがあった。南北道の間に横たわるのがタクラマカン砂漠である。◆「西域南道」では、チンギス・ハーン及びその子供たちを中心に、この地(カシュガル、ヤルカンド、ホータンなど)のモンゴル系諸民族の活動を主とし、宗教絡みで描く。
	西域の詩人	【第3巻】「長安の夢」はなやぐ夢の都、長安。李白、杜甫、白居易、王維らの詩人が生き生きと描く唐代の国際都市長安。そして、三蔵法師玄奘も登場する。◆「西域の詩人」まず、現地に行かずに西域を詠んだ詩人として、王翰(おうかん)及び王昌齡に言及したあと、西域の大地に立って西域の風物を見て詠んだ岑参(しんじん)に紙幅を割く。
	理想郷と理想人	【第4巻】「シルクロード巡歴」楊貴妃、玄奘、マルコ・ポーロほか、時代を越え歴史の主役が見つめた流沙の道をたどり、唐の都長安から西域、イラン、トルコへ。王朝、民族の興亡を子細に描く。◆「理想郷と理想人」モンゴル時代、最も有名だった「西域の文人」として耶律楚材をあげ、詳述する。あと、プレスター・ジョン伝説について語られる。
	東西をつなぐ人	【第5巻】「西域日誌」東西をつなぐ回廊への旅。絹の製法伝来の秘密、玉を産する伝説の山、ベルシャのバザールなど博学な知識でシルクロードのすべてを語る西域シリーズの最終巻。◆「東西をつなぐ人」前半は、明の永楽帝の命で大船隊を率いて前後7回南洋・インド洋方面に遠征した鄭和を、後半は、ティムール帝国の創始者ティムールを取り上げる。
第三部	辺境歴史紀行	陳舜臣編集・解説『中国辺境歴史の旅』(1986-87 白水社)全8巻の各巻末に陳舜臣さんが刊行当時の歴史的背景とそれぞれの書物について書いた「解説」の文章8編。■各巻の説明は、白水社版内容紹介より転載
	動乱の新疆	【第1巻】「新疆紀遊」 戦乱西域の生の記録。中国と日本の間に9, 18事変(満州事変)が勃発したころ、中国西部の新疆省も戦乱の中にあった。近代史に忘れられた感のある中国辺境も、世界の流れの影響を受け、大きく動いていた。本書は、その戦乱の渦中にあった著者が語る近代中国の生きた証言である。
	新しい女性の里帰り	【第2巻】「女性大使チベットに行く」 ラサをめぐりて。中華民国政府樹立後の1929年(民国18年)、1人の若い中国人女性が自ら志願し、蒋介石の命もあって、当時西康省と呼ばれていた東チベットを経て、長途ラサへ向かう視察の旅に出る。これは、新しい中国の建設を夢みる若い中国人女性の情熱あふれる旅行記である。
	人間の運命	【第3巻】「東チベット紀行」 辺境の和平交渉記。揚子江、メコン川、サルウィン川が南北に平行して流れる、東チベットのカム地方。中国とチベットの間に永く紛争の続いた地である。この深い峡谷と険しい峠を越え、1918年に再燃した紛争の和平交渉を結実させるべく、著者の1年に亘る旅が続く。また、中国西藏間の交渉の歴史も掲載した。
	革命の風吹きささぶ	【第4巻】「東トルキスタン風物誌」 東西文化交流の歴史を訪ねる。東西文化交流の接点ともいえる中国領トルキスタンは古代遺跡の豊庫である。ル・コック率いるドイツの探検隊は、この東トルキスタンから多くの貴重な美術品や古代遺物を発掘した。東トルキスタンの風物を背景にしながら、古代からえんえんと続く東西の交渉の歴史が浮かび上がる。
	竜種の人	【第5巻】「中央アジア騎馬行」 中央アジアの遊牧民の中で。ロシアの南下政策に対抗して、英国は新疆全域の踏査を必要とした。本書は、1927~31年にかけて、その任務に当たった著者の紀行であるが、苦しい踏査行の中で、著者の眼は現地住民の生活に詳細に注がれ、特に高地遊牧民の雄渾な生活ぶりに、心から感嘆している。
	挫折の旅	【第6巻】「天山から青海へ」 無念の大旅行。19世紀後半、英国のチベット政策に対抗し、ロシアも大がかりな踏査隊をチベット周辺に派遣した。著者が、青海省の積石山中で半身麻痺の病に倒れるまでの、中央アジアの雄渾な旅行記である。
	歴史の流れのなかの旅	【第7巻】「アジアを跨ぐ」 1924年1月1日、長途イスタンブールを思い、北京駅頭に立った日本の青年がいた。「緊蹙一番、今生最後の奮闘をやってみるだけだ」。道中、悲壮な決意をみせながら、尺ハ一管を手にした1年9ヶ月の一人旅である。シルクロードのロマンあふれる旅日記。
	まとめを待つ探検	【第8巻】「西域旅行日記」 大谷探検隊の未発表記録。1902~04年の第一次大谷探検隊の日記の抜粋。ホータンからアクス、カシュガル、クチャ、キジル、クルラ、トルファン、ウルムチまでの主要部を掲載。

『西域シルクロード全紀行』
(読売新聞社) 全5巻



『中国辺境歴史の旅』(白水社) 全8巻



第二部「敦煌以前のこと」補足